福岡女子大学国際文理学部紀要
「文藝と思想」第八六号　二〇二二年二月　一～一五頁

説話にみる文事の志向

――『古今犬著聞集』序文と考証的説話――

大久保　順　子

『古今犬著聞集』（以下、本論では『犬著聞集』と略記する）は、貞門の俳諧作者である椋梨一雪の天和四年（一六八四）の序をもつ全十二巻の一大説話集的作品である。本作品は日本諸国の奇談・怪異譚から教訓・敵討・事件話等に至る様々な内容の、総題数三百九十一にわたる所収話をもつ。作者の一雪は晩年、これらの所収話に説話を追加した『続著聞集』（宝永元年序）を再編集し、『犬著聞集』『続著聞集』はともに写本が現存する。[1]『続著聞集』の所収話が後代、『新著聞集』（寛延二年刊）として改題刊行出版されたことにより、その膨大な所収話群は著名な近世説話集の一系統として知られることとなった。先の論考[2]においては、この『犬著聞集』の和歌説話の背景を踏まえ、仏教説話と事件説話の題材の選択、評語的記述等の諸所に、作品成立時の作者の「当代」的な興味と意識が色濃く窺われることを指摘した。本論では、『続著聞集』序文と比較した『犬著聞集』の「天和四年序」と、所収話の記述の表現から窺われる、当時の作者の意識について考察する。

一、『古今犬著聞集』と『続著聞集』の序文の発想と意識

現存写本の『犬著聞集』巻一には、所収される三十九話の目録の次に「天和四年甲子歳孟春」の年記をもつ自序が記されている。本文の記述[3]を以下の①～⑦に整理し、その展開について考える。

①世の中の人の心はおかしき物かな、高くとてやんことなき人より、卑くくたりて賤山かつのるひまて、老たるとなく若きとなく、人にひとつの癖は有物から

②(1)あるは仏の道にかかつらひて家を捨、種子を断族有

(2)あるは神の御わさを執行ひ、いもゐに籠、物いみするあり

(3)あるは唐の日本の文に心を尽し、詩を賦哥をね(ふし)り(詠ヒ)、花の春月の秋に友をこひ、しらぬ野山に分入、酒呑、しとろに謡ひ、酔なきし、帰さにあらぬさましたるも、月花に思ひ付(ふけて)みの癖ならし

(4)あるは男女の色にまとひて、九夏三伏の暑をも、冬の夜雪霜をふみ寒をも忘れ、命あやうく、邪なる道に至るは、暫く血気さかんにして若きあいたの癖ならすや

(5)風も吹あへす静成空に打そゝく雨、顔にほろ〳〵とかゝるか、いとたえかたき蹴鞠の交、囲碁双六は云もさらなり、四一半加留多やうの遊びに、日を暮し夜を明し、親子兄弟の中にも心を動し、あらそひ、顔を赤め唇をひるかへす、増は、友とちのあいたは何かは恥ぬへき

③誠に斯くかそふるに、能きはよき、あしきはあしき癖のあらさる人やはなき

④我にも一つの癖あり、昔は若かりし時より人と語ることに、なにはにつけて、耳の底に残る程のよしなしことを、反古のうらに、筆の海浅き心に、伊奈佐細江のみをつくし、記しとゝめ置侍し

⑤いちや老の話も立かさなり、いそ字を越る身にしあれは、今一きさみ生の松、千とせをふるとも、ついの道はのかれやせし

⑥増て、如二朝顔の一花の露よりもろき人間、不定のさかひに身を置ぬ、せめて片時もかく命なからへしを、更の

事にして、腰をかゝめ目をすかめ、そゝろに清書に至りぬ

⑦さゝのは猿の智恵ほともなくて、むしほの老さらほいし身のなすわさなれは、犬著聞集と名付侍る物ならし

記述される文章に沿って、その表現を辿ってみる。①の「おかしき物かな」「高くとてやんことなき人より、卑くたりて賤山かつのるひまて」は、おのずと『徒然草』一四段の「和哥こそなをおかしきものなれ。あやしのしつ。山かつの。しわさも」[4]等を想起させるものである。この序文の「『徒然草』ぶり」はさらに続き、②⑶の「酒呑、しとろに謡ひ、酔なきし、帰さにあらぬさましたるも」が『徒然草』一七五段（「酒をすゝめて。しゐのませたるを。興とする事。いかなるゆへとも心えす」「声のかきり出して。各うたひまひ」「あるは酔なきし。下さまの人は。のりあひ。いさかひて。あさましく。をそろし」）を、また②⑷「男女の色にまとひて」「暫く血気さかんにして若きあいたの癖」が同一七二段（「わかき時は。血気うちにあまり（中略）物とあらそひ。心に恥うらやみ。このむ所。日々にさたまらす。色にふけり。情にめて」）を髣髴させる。④の「なにはにつけて、耳の底に残る程のよしなしことを」「記しとゝめ置侍し」は、言うまでもなく『徒然草』序段（「こゝろにうつりゆく。よしなしことをそこはかとなく。かきつくれは」）の「よしなしこと」を意識したものに他なるまい。

しかもこの序文全体には、『徒然草』に留まらない先行文芸、殊に和漢の古典を利用した修辞が施されている。①「人にひとつの癖は有物から」に関しては、『白氏文集』巻七・閑適三「山中独吟」の「人各有一癖、吾癖在章句」[5]の詩句が知られる。室町の歌論書『正徹物語』の慈鎮和尚の逸話と和歌[6]、

慈鎮和尚其頃天王寺別当にて、かの寺に渡らせ給ひしかは、あれへ御状をもつて参りけれは、御返事には悦入り承候とて、一首の哥を奥に書給へり

みな人に一のくせはあるぞとよ是をはゆるせ敷嶋の道

の「敷嶋の道」を愛好する慈円の「癖」の歌も、「吾癖在章句」等を源とするものであったのかもしれないが、室町末から近世初期の歌人や俳人に知られていた逸話とみられる。①の言辞がこれらに拠る表現であるなら、その序文の筆者一雪の示す「癖」が志向するものとは、やはり章句や和歌に象徴される「文事」のことであろうと考えられ

る。また、②③の『徒然草』一七五段的な酩酊者を表現する箇所の前後には「花の春月の秋に友をこひ、しらぬ野山に分入」「月花に思ひ付みの癖ならし」がある。これらも、『古今和歌集』仮名序の[7]「あるは花をそふとてたよりなき所にまどひ、あるは月を思ふとてしるべなき闇にたどれる心々を見たまひて、賢し愚かなりとしろしめしけむ」や「富士の煙によそへて人を恋ひ、松虫の音に友をしのび」のような、「唐の日本の文に心を尽し、詩を賦哥をねる」ことに心を尽くす人々の姿を表現するものであろう。

この文事への志向性は、④「筆の海浅き心に」が『新古今和歌集』仮名序「言葉の園に遊び、筆の海を汲みても、空飛ぶ鳥の網を漏れ、水に住む魚の釣りを逃れたる類は、昔もなきにあらざれば」を、また、「伊奈佐細江のみをつくし、記しとゝめ置侍し」が「遠江引佐細江のみをつくし我を頼めてあさましものを」(『万葉集』巻十四　三四二九)を、それぞれ思わせる表現であるところにも窺える。そしてそれらは、「我にも一つの癖あり」と次第に語り出されていく、ひたすら「反古のうらに」「記しとゝめ」る人間＝説話作者の行為に、相応しい言葉の「姿」を与えている。「九夏三伏の暑をも、冬の夜雪霜をふみ寒をも」の「九夏三伏」(夏至後第三庚日から三十日の初伏・中伏・末伏)は一年のうち最も暑い時節であり、源順「奉同源澄才子河原院賦」の「九夏三伏之暑月竹含二錯午之風一」(『本朝文粋』巻一、『和漢朗詠集』巻下)[8]を思わせる。また「如朝顔の、花の露よりもろき」も、「おきて見むと思ひしほどに枯れにけり露よりけなるあさがほの花」(曽祢好忠、『新古今和歌集』巻三秋上、三四三)や「風をまつ草のはにをく露よりもあだなる物はあさがほの花」(源実朝、『金槐和歌集』秋、一八五)のような「朝顔」「露」の情調を共有する表現である。これらが『徒然草』一七三段風の「男女の色」「邪なる道」に接続されることによって、一種の雅俗混交的な味わいを生んでもいる。

古典的な「雅」の「癖」だけでなく、「仏の道」や「神」への「いもゐ」(精進潔斎・斎戒)、さらには「俗」の「四一半」(賭博の一種)、「加留多」(紙札賭博)等も、人々の「癖」として例示される。総じて、「いそ字を越る身」の「老」と「不定のさかひ」[9]を意識し、「むしほ」[10]な身を自覚して「腰をかゝめ目をすかめ、清書に至」るという筆者が、「若かりし時」から当時に至るまでの「雅」と「俗」の両方に興味を向けている。『犬著聞集』序文に展開す

る文辞は、そうした「天和四年」の筆者の、雅俗にわたる雑多な説話蒐集の多様な興味拡大の志向性を象徴するものとして書かれたと考えられる。

『犬著聞集』序の約二十年後の宝永元年の序をもつ『続著聞集』は、作者椋梨一雪が『犬著聞集』以前と以後の蒐集説話を後に再編集した作品で、『犬著聞集』所収話と非所収話の混在する説話集である。一雪による『続著聞集』巻頭の序文[11]は、全二十巻の各主題別巻立による「著聞集」的意識を解説するものとなり、『犬著聞集』序文とは大きく変化している。以下、その本文を引き、A～Eの部分に整理して考察する。

A夫、古より観るへき事を記し、法るへき詞を述る事、和漢に於て、麻よりも並み繁く、粟よりも数多く、実に千万世の警誡、是より大なるは侍らじ

B爰に余、幼より塵俗の間に身を寄しかは、貴き文章の名は稀に聞しかと、終に一二の篇をも見侍らで、最愚に朽果し、然と云へとも、世間の常の業に異なり、変りて耳にふれ、腹に云へる類を聞侍て、悪き事はおちおそれ、善き事は仰尊みし事なれは、是を云伝へて、童の類鄙しき族を誡め導きし事もまゝ有し

C是より彼童子の暴謔を禁するには、師友の誡も傅婢の指揮にはしかす、凡人の闘鬩を止るには、堯舜の道も寡妻の誨諭にはしかすと云る類なりし故に、是も又、捨て遣るへき事にも非ずと思て、寸楮を片紙に筆し置くに、若干条と也ぬ

D今年八旬の齢ひに及て、語り演んも舌渋れ、訂し録せんも才短し、亦遺骨と共にしはてんもいと心おとりせしかは、止事を得ずして、聚て続著聞集と名け、其部類の紛らはしきを斂めて、二十の篇目を立て侍りぬ

（※以下略、二十篇の各主題説明）

E以上、二十篇目は、只是、老耄の忘れ易きに備て、其事の相類せる者を聚て収るのみ、実に其義に尽すとにはあらず、宜くみんもの、これを知り給へ

『続著聞集』の序文では、A「古」より伝わる「観るへき事」「法るへき詞」、その膨大な「千万世の警誡」と比べ、B「塵俗の間」の人生にあった自身が「貴き文章」を見る機会も得られぬまま老いた、という筆者の自己規定が示さ

れる。「塵俗」の世界の中でその後さらに老齢に至ったことを自覚する筆者が記すものは決して「やんことなき」ものではなく、「世間の常の業に異なり、変りて耳にふれ、腹に云へる（立つる）類」にすぎない。しかしB「童の類鄙しき族を誡め導きし事もまゝ有し」という回想の次に引用されるのが、Cの『顔氏家訓』第一序致篇「禁二童子之暴謔一、則師友之誡不レ如二傅婢之指揮一、止二凡人之鬪鬩一、則堯舜之道不レ如二寡妻之誨諭一」(12)である。聖人の言葉よりも身近な者の言葉の方が一般の人々には効果的である、という譬えは、決して「観るべき」「法るべき」優れた「警誡」の言葉ではなくとも、世俗の奇談や雑多な話題をC「是も又、捨て遣るへき事にも非ずと思て、寸楮を片紙に筆し置く」筆者の姿勢につながる。そこには、序致篇の文脈に続くフレーズ「吾望、此書為汝曹之所レ信、猶賢二於傅婢寡妻一耳」と共通する著者の自負も暗黙裡に込められているのかもしれない。『古今著聞集』の「註緝為二三十篇一。編次二十巻」（序）に対し、『顔氏家訓』は「二十篇」であり、「故ニ留二此二十篇一、以為二汝曹後範一耳」(13)（第一序致篇）等の表現するものに比する意識を『続著聞集』序文が持っている可能性もある。

D「今年八旬の齢ひ」の筆者は、肉体的にも記述の困難さを抱えており、老耄の「備忘」であると断りつつも、自ら蒐集した話を「そゞろに清書」した雑集のままには置かず、その部類を斂め篇目を立てようとする。天和四年序文で「我にも一つの癖」から始まる「よしなしこと」としていた話群には、さらに「又」「若干条」が増補されることとなった。『続著聞集』序文の「筆し置く」、そして「語り演」べ「訂し録」するという語は、その目的意識が織り込まれた表現である。そこには、天和四年以降宝永元年までの筆者の筆録と編集の過程を経て、もはや「よしなしこと」という韜晦よりも、「舌渋れ」「才短」くとも「捨て遣るべき事にも非ず」「遺骨と共にしはてんもいと心おとりせしかば」と、聞き集め著そうとする態度があり、伝聞と教訓に向かう姿勢は『犬著聞集』序文よりも明確になっている。その企図により「著聞集」形式に篇目を整えた筆者は、こうしてようやく『犬著聞集』の「犬」をとり「著聞集」に「続」く『続著聞集』にしたものと考えられる。

二、歌語注釈と「考証」を語る説話

編集された教誡的主題の解説に比重を置く『続著聞集』序文と比べ、『犬著聞集』序文の方は『徒然草』『正徹物語』的な修辞により、中世和歌等を志向する近世初期風の文飾的な余裕を感じさせる。[14] 和歌文学的な傾向のレトリックを駆使する序文の表現が示す志向性は、『犬著聞集』の所収話の造型の中にも窺われる。近世歌人の事件への興味関心から説話集に収められたとみられる当代的な歌徳説話[15]の他に、和歌や古典文学の解釈を語り手が論評する所収話が存在することも、その顕れである。巻二ノ二九「千代の古道の事」の例を引く。

①　嵯峨の山行幸ふしにし芹川の千代のふる道あとは有けり

　此歌につきて、嵯峨に千代の古道といへる名所有様に心得つゝ、爰哉かしこ成とあらぬ所をさしていふ人、世に多し

②芹川の御幸は、嵯峨天皇始てし給ひし、その後、淳和仁明文徳の三皇を越て、光孝天皇の御代に、嵯峨天皇の例にて又芹川に行幸なし奉りし、此時行平朝臣のよみたまへる歌也

③されは嵯峨天皇の例なれは、伏見竹田の芹川にして、方角はたかひなから、嵯峨山といひ、絶て久しきむかしをしたはせ給ひての行幸なれは、千代の古道とよめるなるへし、名所はなし

「千代のふる道」の歌は『後撰和歌集』巻十五の「仁和のみかど嵯峨の御時の例にて芹河に行幸したまひける日」を詞書とする在原行平朝臣の歌（一〇七五）であり、『後撰集』の続く「翁さび人なとがめそ狩衣今日許とぞたづも鳴くなる」（一〇七六）及びその詞書「おなじ日、鷹飼ひにて狩衣のたもとに鶴の形を縫ひて書きつけたりける」「行幸の又の日なん致仕の表たてまつりける」が『伊勢物語』一一四段の内容と関連するものとして知られる。

この歌の「嵯峨の山」「千代の古道」を「嵯峨」の名所や歌枕と考える説があることを『犬著聞集』は批判し、光孝天皇と行平の芹川御幸の『伊勢物語』一一四段の内容をもとに、嵯峨を嵯峨帝の比喩として、「千代の古道」を竹田の芹川とする説を支持している。このことは近世初期以前の歌論書や注釈書にも指摘されていた問題で、例えば

『袖中抄』巻五に[16]

顕昭云、是は後撰ノ詞云、仁和帝（ノミカド）さかの御時の例とて、芹河（セリ）の行幸し給けるに、行平朝臣のよめる哥也、せりかはの野へとは能因歌枕ニ云、芹河野といへり、（中略）是をおもへは、芹河野の行幸といふは、鳥羽の南のせりかはといふ事うたかひなし、但考二帝皇系図一に、嵯峨深草（サカフカクサ）の御時に芹河ノ行幸といふことはしるさす、光孝天皇（クハウカウ）仁和二年十二月十四日有リ二芹川ノ行幸一云々、而上さがのやまみゆきたえにしせりかはとよみたるは、其つゝきをおもふに、さかのかたに芹川といふところのあるかとうたかふ人あり

能因歌枕に、山代国の山をあけて四方をさためたるに、嵯峨山をはいつかたとも知らぬ山の中にあけたり、をくら山かめ山なとのついてにもあけさるもあやしき事也、只みかとの御名によせてさかの山とはよめるなり。且は後撰にもさかの御時の例とかきたり。又国史ニ云、嵯峨ノ院嵯峨ノ山といへり。然はさかのやまみゆきたえにしせりかはとは、さかの御時の芹河のみゆき絶にしことをよみたれはたかはす

とある。北村季吟『八代集抄』の「後撰和歌集巻第十五」注釈[17]は

(a)愚案、但此集に嵯峨御時の例とあれは、嵯峨の帝も野行幸有し例にて、光孝天皇も如此なるへし

(b)せり川に　袖中抄に、大鏡に深草の帝の頃の芹河行幸に、琴の爪をおとし給へるを、昭宣公拾ひて奉給ふ所に、極楽寺を建立し給ひし事をひきて、鳥羽の南に芹河あり、是なりといへり、師説、嵯峨にあり、千代の古道葛野郡にあり、定家卿さかの山千世の古道あとゝめてと、新古今によませ給へは、芹河嵯峨なるへき事勿論歟云云

(c)さかの山みゆきたえにし　八雲御抄云、さかの山は、行平詠非（スス）レ山ニ只天皇の御事を山といへり、愚案、嵯峨の天皇野行幸のゝち、絶たりしを、今光孝天皇の幷興の御事を、千代の古道跡は有けりとよめり。みゆきを深雪にそへて、雪消の道の跡とめ行心はへによめるなるへし、為家云、嵯峨之山也、非野、ヨミクセなり

と諸論を引き、中世以降の嵯峨説との両論を指摘している。また、『八代集抄』「新古今和歌集巻十七」[18]では、この行平歌を本歌とする藤原定家の歌（雑中、一六四四）

後白河院栖霞寺（セイカシ）におはしましけるに駒ひきのひきわけの使にて参けるに

嵯峨のやま千世のふる道あとゝめて又露わくるもち月のこま

について、「栖霞寺　一条禅閤花鳥余情云　棲霞観（セイカクハン）は左大臣融（トヲル）公の山荘也、後に寺に成て栖霞寺といふ、今の清涼寺（セイリャウジ）の東にある阿弥陀堂是也」「本歌は光孝天皇御宇の御時の哥也、本哥をうけて又露わくるといへり、駒をひきわくる事をよそへていへり」の注記により、源融公が嵯峨天皇皇子であり、別荘栖霞観、すなわち後の阿弥陀堂もまた嵯峨にあることが指摘されている。季吟は寛文初年成立の『伊勢物語拾穂抄』[19]の伊勢物語一一四段注釈にも、『闕疑抄』を引用しつつ、「玄　芹河ノ行幸は嵯峨天皇の行幸を始也（中略）今此行幸は光孝天皇也。師　芹河は嵯峨にあり　顕昭袖中抄には竹田に在云云」と、「師説」松永貞徳説を併記している。なお、元和三年板『類字名所和歌集』[20]では、巻二「千代古道　山城葛野郡」、巻六「嵯峨　野　川　山城　葛野郡」、巻七「芹河　同（※引用者注　山城）当国両所有之云々仍歌可心得也」のそれぞれが行平歌を掲載し「両所」説を示唆している。行平歌を本歌とする定家歌と詞書が示す「栖霞寺」のもたらすイメージ等が、中世以降の「嵯峨山～千代の古道」の嵯峨説の流布の一因となったものと推測される。

季吟の『八代集抄』『拾穂抄』とも、千代の古道「嵯峨説」を覆す程の筆致ではなく、従来の諸注を総合している。寛文延宝頃の盛んな「古典注釈併行期」[21]にあったとされる季吟の『伊勢物語拾穂抄』は延宝八年〈一六八〇〉刊、中世歌学注釈から師の貞徳説までを総合した天和二年（一六八二）刊の『八代集抄』もほぼ延宝七～九年頃の成立である[22]。こうした諸注釈書の刊行と解釈の内容は、『犬著聞集』の作者にとっても「当代」的な関心の対象であったと考えられる。季吟の「師説」は貞門の一雪も疎かにできなかったとみられるが、『犬著聞集』作者としては『伊勢物語』と『後撰集』詞書のテクストに基づき竹田説を記し正そうとする姿勢を、巻二ノ二九に示したのではないだろうか。

このような歌語をめぐる注釈考証風の話は『犬著聞集』に散見し、作者の古典注釈への少なからざる興味を窺わせるものだが、注釈書の学説の方向を踏まえつつ自論を加えたとみられる部分もある。巻十ノ二九「伊勢物語四十

九段めの事」は次のように記される。

昔男、妹のおはしけなるをみやりて

うらわかみ寝よけに見ゆる若草を人のむすはんことおしそおもふ

業平、妹にけさうしけるといふは、人のむすはんことをしそおもふと有、人の字を、他の字とみるより誤出来侍りけらし、此人の字は君臣と読、臣の字也、業平の妹を見て、かれは平城天皇の御孫阿保親王の子、母は桓武天皇内親王、しかれは父母ともに恐らくは人にもうてぬ氏種性也、各義帯佩又類ひなし、然は御門に奉つゝ、女御后にそなわりもすへきに、臣の結はんことおしそおもふ、と見るへきにや、此内に、自の官位の卑く時にあわぬ述懐の心も有ぬへし

業平の「ねよけにみゆる」妹の「人のむすはんことをしそおもふ」について、「妹にけさうしけるといふは」「誤」である、とする指摘には、近世初期までの伊勢物語古注の解釈の影響が考えられる。

・ねよけに見ゆるとは寝と根とかけていへる也、心は我妹なれば子細なしとはみれど、他人はいかゞ思はんやと、妹をあはれむ心也。人のむずばんとは人の契らん事を思ふ儀也。

（宗祇講、牡丹花肖柏聞書『伊勢物語肖聞抄』[23]）

・源氏物語なとに引時は業平のけさうせられたるやうにあり、一向不可用云云。常には上の注のやうにいへとも然らす、妹をふひんにおもひて憐憫也、ねよけは根と寝とを兼たり、我は妹を子細なしと見れ共、人の心は万差なれは、何たる幸をもひかすしてやあらんと心苦しく思也、憐憫の心猶末に見えたり

（三条西実隆、清原宣賢書『伊勢物語惟清抄』[24]）

・源氏あげ巻に（中略）是よきとりあはせにてはあり、されとも此哥の心をはかくは心得ましきなり、二条家の心なとに更に左様には有ましき事なり、伊勢物語、源氏なとは好色をは本とせず、毛詩三百篇も男女の事をもつて政道の本とせり、ものをとゝのふる事女也と云故也（中略）いもうとに心をつけて行末を思ひたる所、後に露顕する也、うらなくは底に徹してか様におぼしいれたる心よと見て、にくき方とは思ふへからず

（細川幽斎『伊勢物語闕疑抄』[25]）

・師云　此段は妹(いもうと)をめぐみ兄(あに)を敬(うやまふ)ことを書り　兄弟(けうだい)は五倫の一なり　（浅井了意『伊勢物語集註』）[26]

『惟清抄』は『肖聞抄』の「あはれみ」の説を受けながら「妹への懸想」説を「然らず」と否定し、『闕疑抄』は『肖聞抄』『惟清抄』の態度を引き継ぎつつ教誡的姿勢を強めている。『伊勢物語集註』はさらに教誡的に五倫の道を解釈に示した例である。前出の季吟『伊勢物語拾穂抄』も、特に『闕疑抄』の好色否定の説を引き「政道のたすけとしたることおほし。源氏伊勢物語も心(コヽロ)して見る事哥道の習ひにて侍り」と釈している。

これらの注釈は『伊勢物語』四九段を好色な業平の妹への懸想譚とは見ず、兄として妹の結婚と将来を案じ「あはれむ」「不便に思ふ」話とする。『犬著聞集』巻十ノ二九はこれらの説に基づきつつ、歌学者の先行注釈書の本文引用よりもやや自由な幅をもたせ、古注の指摘する「憐愍」の背後の含意――皇統の血筋である妹が臣下に嫁ぐことへの憐愍、さらには業平自身の官位の低さへの歎き――にまで言及した解釈を示す。一種の考証的説話として古典注釈に依拠した影響を窺わせつつも、独特の筆致をもつ論評の姿勢が、本話の特徴と考えられる。

巻十ノ一八「富士の雪の事」では、『新古今和歌集』冬部の赤人の「田子の浦」歌への紹巴の疑問に対し、作者は「子細有」として次の「祇の下揃に曰」以下の説を記す。

冨士の雪といひて雑也、消雪そ夏也、万葉集第三に、冨士のねに降つむ雪は水無月のもちにきぬれは其夜降(きへ)け
り、此歌を引のせられたり

宗祇『名所方角抄』寛文六年（一六六六）板本[27]の本文に

冨士の雪は六月十五日に消て其夜降といへり、万葉集に、冨士の根に降置雪は六月のもちに消ては其夜降つゝ、
されは冨士の雪はふるも消も六月なり、仍時しらぬ山なと云り

とある。『万葉集』巻三の三二〇歌を引き「時知らぬ冨士の雪」を雑、「冨士の消雪」を夏、とする本話の指摘は、このような解説等にみられる連歌用語観に依拠した論であろう。

巻十ノ一四「節木の中の郭公の事」は、「信州高遠の藤沢作右衛門」の下人が冬「節木の中より」発見した「死たる」郭公が「翌年の弥生の末つかた」に箱から飛び去ったという話である。話末では、「是鳥は秋より後、春迄は朽

木なとのうちにかくれ居にや、されは古歌に、おく山の朽木にこもるほとゝきす夏をまちてやねには鳴らん、是を思ふに、冥途の鳥といふ説もよみかへりて来るゆへにや侍りけんかし、尋ぬへし」と論じられる。世俗的な地方風俗の説話と思しき内容に「引歌」による解釈を寄せる形で、説話が構成されている。この「古歌」の出所は未詳であるが[28]、作者は地方の世俗説話の語り方においても、証歌を用いる古典的な考証のスタイルを踏まえているようである。一雪の蒐集する豊富な話題が当代的説話となって「増殖」するのは、このような方法によるところも少なくないと考える。

松永貞徳や山本西武に学んだ貞門俳諧作者[29]であった椋梨一雪は、『犬著聞集』『続著聞集』や『日本武士鑑』等、その説話集的な作品において、自らが学んだもの――古典的学芸の伝統――と、武家的「筋」の権威など、世における一種の「正統性なるもの」を尊重する価値観と、それに基づく批判意識の窺われる著述者である。

「著聞集」的な類纂的形態の『続著聞集』と比べ、雑纂的形態の『犬著聞集』は、近世初期の説話集として、当代の独特の事件話と新奇な「奇談」を語る話とを混在させている。だがその中にも、幾つもの典拠に基づく修辞と文体の性質にみるような、中世以前からの伝統的「学芸」や「文事」の意識とそれに基づく規範意識や矜持を、随所に色濃く残している[30]。それらは「十七世紀の初期の知識人」たる作者たちの手による仮名草子諸作品に通う態度でもあり、『犬著聞集』は一雪の説話集の中でも特に、中世の文芸から近世当代の文芸への架橋的な意識を窺わせているといえる。『徒然草』よりさらに時代が下ってしまった近世において、王朝文学の時代から続く「伝統的本意」なるものも不変ではない。定家や兼良、さらに師の貞徳に至るまでの「古典注釈のありよう[31]」の変質が起こっていることを、作者一雪もまた「当代」において文事を為す者として認識しつつ、自らの説話集で論評のように「語る」営為を選んでいるのではないか。その文芸的意識と説話内容の関わりについて、引き続き考察を行いたい。

注

（1）樫澤（田中）葉子「『新著聞集』の成立――『犬著聞集』『続著聞集』との関連から――」（『語文研究』62、一九八五年十二月）

（2）拙論「『古今犬著聞集』における「評語的記述」の諸問題」（『八戸工業高等専門学校紀要』31、一九九六年十二月）、同「延宝八年」の仏教説話――『古今犬著聞集』所収話考(2)――」（『香椎潟』49、二〇〇三年六月）

（3）『仮名草子集成』第二十七巻（東京堂出版、二〇〇〇年七月）、及び底本の東北大学附属図書館狩野文庫蔵本本文をもとに、『京都大学蔵 大惣本稀書集成』第七巻（臨川書店、一九九六年七月）所収の京都大学蔵本を底本とする翻刻本文を参照し、異同を補った。なお、本論における『仮名草子集成』所収作品本文の引用では、改行や読点の位置を便宜上改め、番号や記号、傍線を適宜引用者が付した。

（4）『徒然草』万治二年板本（国文学研究資料館蔵、新日本古典籍総合データベース https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200002158/viewer/68）画像参照。章段数表示は日本古典文学大系（岩波書店）本に拠る。

（5）国立国会図書館蔵『白氏文集』元和四年板本 https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2543993画像参照。

（6）本文引用は肥前松平文庫写本（国文学研究資料館新日本古典籍総合データベース https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100199215/viewer/69）画像及び小川剛生訳注『正徹物語』（ＫＡＤＯＫＡＷＡ、二〇一一年二月）を参照し、改行と読点を加えた。

（7）以下『古今和歌集』『万葉集』『新古今和歌集』『金槐和歌集』日本古典文学大系本（岩波書店）参照。

（8）『和漢朗詠集』巻下、寛永五年板本（国文学研究資料館新日本古典籍総合データベース https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200017087/viewer/7）画像参照。

（9）人生の長さには一定の法則がなく老若の誰が先に死ぬか予測できないこと、無常の意、として解釈する。源信『観心略要集』（寛永三年刊本、国立国会図書館蔵、https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2532210画像参照）に「（第六）止観云（中略）凡ヲ生死無常ナル者不レ択二貴賤上下ヲ一、不レ簡二老少中年ヲ一也、而二世人之愚ナル也、於二老少不定之境ニ一。成二千秋万歳之執ヲ一、只望二財位之踰レ分一。不レ知二栄楽之有レ終一」。

（10）「ぶしほ」（無潮）か。その場合は「潮（愛嬌）のないこと」、無愛想の意となる。なお、本文⑤について注（3）大惣本稀書集成の井上敏幸解説は、二十歳過ぎから五十四歳頃までの「ほぼ三〇年間に及ぶ蒐集の結果が本書」とする。

（11）『仮名草子集成』第四十五巻（東京堂出版、二〇〇九年三月）

（12）『顔氏家訓』寛文二年板本（国文学研究資料館蔵、新日本古典籍総合データベース https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200015414/

viewer/3）画像参照。

（13）注（12）同。

（14）仮名草子の序文では、『にぎはひ草』（天和二年刊）の「つれ〳〵なるいとまなく一生をくるしめ、七十年にあまりて、夢のさめたる心ちするにもあらす、現ともなくまきらはしく日くらし、硯のほこりうちはらひて、たま〳〵筆とりおもひ出ること、そこはかとなく書つけ侍る」「我心に心をつくへき事なりとおもふ事、面白しとおもふ事、あとをさきともわきまへす、物くるおしく書つけをきて、見侍ることに、いつも初音の心ちすこそすれと打すしけるも、物わすれのとくとそ覚え侍る也」をはじめ、「老らくのねざめがちなるおりから。つら〳〵おもひいづる事を。そこはかとなく。かきつゞりて。一まきの文をあたふるならし」（『はなむけ草』貞享三年刊）等があり、近世前期の多くの筆者が『徒然草』序段的な「序文の型」の文体及び発想を意識しているものとみられる。

（15）注（2）「『古今犬著聞集』における「評語的記述」の諸問題」の中院通村和歌と事件説話の造型の例などがある。

（16）『袖中抄』慶安四年板本（国文学研究資料館蔵、新日本古典籍総合データベース https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200001783/viewer/159）を参照し本文に読点を補う。同じく参照した『歌論歌学集成　第四巻』（三弥井書店、二〇〇〇年三月）は、学習院大学蔵本「或人云、さがの山にも共に行幸ありける事をとりあつめて詠ずる歟と申せど、この歌の心にかなはず。嵯峨の山、さがの御時をさすなり。さがの山みゆき絶にし芹川とは、まれなる故なり」の部分的な追記の存在を指摘する。

（17）『八代集抄』天和二年板本（国文学研究資料館蔵、新日本古典籍総合データベース https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200006477/viewer/1）及び山岸徳平編『八代集全註』（有精堂出版、一九六〇年七月）を参照し、段落を分けて改行し記号と読点を補う。

（18）注（17）同。

（19）『伊勢物語拾穂抄』延宝八年刊本、国文学研究資料館新日本古典籍総合データベース https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200016372/viewer/1画像参照、読点を補う。大津有一『増補版　伊勢物語古註釈の研究』、八木書店、一九八六年二月）に拠る。

（20）村田秋男編『類字名所和歌集 本文篇』（笠間書院、一九八一年一月）

（21）野村貴次『北村季吟の人と仕事』（新典社、一九七七年十一月）、佐藤勝明「北村季吟――作句と古典注釈」（『国文学解釈と鑑賞』第65巻5号、二〇〇〇年五月）

（22）川村晃生「北村季吟の『八代集抄』」（『国文学解釈と鑑賞』50巻1号、一九八五年一月）

（23）『伊勢物語肖聞抄』慶長十四年板本、巻中（国文学研究資料館鉄心斎文庫蔵、新日本古典籍総合データベース https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200025158/viewer/85画像参照。以下適宜読点を補う。

（24）『伊勢物語惟清抄』内閣文庫蔵写本、巻下（国文学研究資料館新日本古典籍総合データベース https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100011839/viewer/119）画像参照。以下適宜読点を補う。

（25）『伊勢物語闕疑抄』万治二年板本（国文学研究資料館蔵、新日本古典籍総合データベース https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200001894/viewer/79）画像参照。

（26）『伊勢物語集註』慶安五年板本（国文学研究資料館新日本古典籍総合データベース https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200025241/viewer/191）画像参照。

（27）国文学研究資料館古典籍共同研究センター蔵、新日本古典籍総合データベース（https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200021672/viewer/75）画像参照。

（28）「ほととぎす」の古歌のうち「こかくれていまそきくなるほととぎすなきひひかしてこゑまさるらむ」（赤人集、二二六）、「年をへてみ山かくれの郭公きく人もなきねをのみそなく」（実方、拾遺集一〇七三）等の「音を鳴く」時鳥の「深山かくれ」「木かくれ」や、「朽木」の古歌「かたちこそみ山かくれのくち木なれ心は花になさはなりなむ」（古今集、巻十七：雑上八七五）等の、「朽木」―「奥山」「深山かくれ」―「ほととぎす」の連想の親和性によるか。

（29）井上敏幸「椋梨一雪年譜稿」（『近世文芸』32、一九八〇年三月）

（30）『続著聞集』全二十巻（序文による）は現存写本では前半十巻まで確認できるが『犬著聞集』から『続著聞集』に再所収された同話の全貌は未詳である。注（1）（2）の先行研究の指摘のように、『続著聞集』をもとに後代再編刊行されたとみられる『新著聞集』所収の同話群を比較すると、話末のコメントも変化しているものが多い。

（31）前田雅之「和漢から漢和へ――対中国観の変容から――」（『日本文学』70巻6号、二〇二一年六月）